

甲乙

泉鏡花作

一

先刻は、小さな女中の案内で、雨の晴間を宿の畑へ、家内と葱を抜きに行つた。……料理番に頼んで、晩にはこれで味噌汁を拵へて貰ふつもりである。生玉子を割つて、且つは吸ものにし、且つはおじやと言ふ、上等のライスカレーを手鍋で拵へる。……腹ぐあひの悪い時だし、秋雨も恚う毎日降續いて、ぞろ寒い晩には此が何より甘味い。

畑の次手に、目の覺めるやうな眞紅な蓼の花と、かやつり草と、豆粒ほどな青い桔梗とを摘んで歸つて、硝子杯を借りて卓子臺に活けた。

……いま、また女中が、表二階の演技場で、寓歳がはじまるから、と云つて誘ひに来た。――

毎日雨ばかり續くから、宿でも浴客、就中、逗留

客にたいくつさせまい心づかひであらう。

私はちやうど寝ころんで、メリメエの（チエルヂス夫人）を讀んで居た處だ。眞個は此の作家のものなどは、机に向つて拝見をすべきであらうが、温泉宿の晝間、搔卷を掛けて、じだらくで失禮をして居ても、誰も叱言をいはない處ありがたい。

が、この名作家に對しても、田舎まはりの萬歳芝居は少々障る。・・・で、家内だけ、いくらからお義理を持参で。――たゞし煙草をのませない都會の劇の義理見ぶつに切符を押しつけられたやうな氣味の悪いものではない。出來秋の村芝居とおなじ野趣に對して、私も少からず興味を感じる。――家内はいそ／＼と出て行つた。

どれ、寢てばかりも居られまい。もう二十日過ぎ少し稼がう。――そのシャルゝ九世年代記を、わが文化の版、三馬の浮世風呂にかさねて袋堀にさしおいた。――此の度胸でない仕事は出來ない。――さて新しい知己（其の人は昨日此宿

を立つたが)

秋庭俊之君の話を書きさう。

中へ出る人物は、藝妓が二人、それと湘南の盛場を片わきへ離れた、蘆の浦邊の料理茶屋の娘・・・・と云ふと、何うも十七八、二十ぐらゐまでの若々しいのに聞えるので、一寸工合が悪い。二十四五の中年増で、内證は知らず、表立つた男がないのである。京阪地には、こんな婦人を呼ぶのに可いがある。(とうはん) とか言ふ・・・・これだと料理屋、待合などの娘で、圓鬘に結つた三十そこらでも、差支へぬ。むかしは江戸にも相應しいのがあつた、娘分と云ふのである。で、また假に娘分として、名はお由紀と云ふのと、秋庭君とである。

それから、一一影のやうな、幻のやうな、繪にも、彫刻にも似て、神のやうな、魔のやうな、幽霊かとも思はれる。・・・・歌の、はつき木のやうな二人の婦がある。

時は今年の眞夏だ。

一一

これから秋庭君の直話を殆ど其のまゝであるといつて可い。一一

「―― さあ、あれは明治何年頃でありませうか。．．．新橋の藝妓で、人氣と言へば、いつもおなじ事のやうでございませうが、繪端書や三面記事で評判でありました。一對の名妓が、罪障消滅のためだと言ひます。藝妓の罪障は、女郎の堅氣も、女はおなじものと見えまして、一念馥起、で、廻國の巡禮に出る。板橋から中仙道、わざと木曾の山路の寂しい中を追つて伊勢大和めぐり、四國まで通路をする。．．．笈も笈も、用意をしたと、毎日のやうに發心から、仕度、見送人のそれ／＼まで、續けて新聞が報道して、えらい騒ぎがありました。笈摺菅笠と言へば、極つた巡禮の扮装で、繪本のも、芝居で見えるのも、實際と同じ姿でございます。．．．もし此が間違つて、たとひ不圖した記事、また風説のあやまりにもせよ、高尚なり、意氣なり、婀娜なり、帶、小袖を其のまゝで、東京をふツと木曾へ行く。．．．と言ふ事であつたとしますと、私の身體は其の時、何うなつて居たか分りません。

尚ほその上、四國通路に出る、其の一人が圓鬚で、一人が銀杏返だつたのでありますと、私は立處に杓を振つて飛出したかも知れません。たゞし途中で、横道を踏にるやら、御嶽おるしに吹飛されるやら、其は分らなかつたのです。

御存じとは思ひますが、川越喜多院には、搦子木を立掛けて置かないと云ふ仕來りがあります。縦にして置くと變事がある。むかし、あの寺の大僧正が、信州の戸隠まで空中を飛んだ時に、屋の棟を、宙へ離れて行く。その師の坊の姿を見ると、丁ど臺所で味噌を摺つて居た小坊主が、搦子本を縦に持つたまゝ、破風から飛出して雲に續いた。此は行力が足りないで、二荒山へ落ちちたと言ふのです。

私にしても、おなじ運命かも知れません。別嬪が二人、木曾街道を、ふだらくや岸打つ琅と、流れて行く。岨道の森の上から、杓を持った金釦が團栗ころげに落ちてのめつたら、餘程……妙なものが出来たらうと思ひます。

些と荒唐無稽に過ぎるやうですが、眞實で、母可  
懐く、妹戀しく、唯心も空に憧憬れて、ゆかりある  
女と言へば、日とも月とも思ふ年頃では、全く遣り  
かねなかつたのでございます。――幼いうちか  
ら、孤だつた私は、其の頃は、本郷の叔父のうちに  
世話に成つて、――大學へ通つて居まし  
た。……文科です。

幸ですか、如何だか、單に巡禮とばかりで、其の  
藝妓たちの風俗から、圓鬘と銀香返と云ふ事を見出  
さなかつたばかりに、胸を削るやうな思ばかりで濟  
みました。

もとより、圓鬘と銀杏返と、一人づゝ、別々に離  
れた場合は、私に取つて何事も無いのです。――  
申すまでもない事で、圓鬘と銀杏返を見るたびに、  
杓を持つて追掛けるのでは、色情狂を通り越して、  
人間離れがします、大道中で尻尾を振る犬と隔りは  
ありません。それに、私が言ふ不思議な婦は、い  
つも、圓鬘に結つた方は、品がよく、高尚で面長で、  
そして背がすらりと高い。色は澄んで、滑らかに白

いのです。銀杏返の方は、そんなでもなく、少し桃色がさして、顔もふつくりと、中肉・・・が小肥りして、些と肩幅もあり、較べて背が低い。此の方が、三つ四つ、然やう、・・・どうかすると五つぐらゐ年紀下で。縞のきものを着て居る。圓鬚のは、小紋か、無地かと思ふ薄色の小袖です。

思ひもかけない時、――何處と言つて、場所、時を定めず、私の身に取つて、彗星のやうに、スツと此の二人の並んだ姿の、顯れるのを見ます時の、其の心持と云つてはありません。凄いと、美しいとも、床しいとも、寂しいとも、心細いとも、可恐いとも、また貴いとも、何とも形容が出来ないのです。

唯今も申した通り、一人づゝ別に――二人を離して見れば何でもありません。並んで、すつと來るのを、ふと居る處を、或は送るのを見ます時には、其の心持がしますのです。」

著者は此を聞きながら、思はず相對つて居て、杯

を控へた。

「―― 恚う聞くと、唯その二人立並んだ折のみで  
ない。二人を別々に離しても、圓鬚の女には圓鬚の  
女、銀杏返の女には銀杏返の女が、他に一體づゝ影  
のやうに―― 色あり縞ある―― 影のやうに、  
一人づゝ附いて並んで、……いや、二人、三  
人、五人、七人、おなじやうなのが、ふら／＼と  
並んで見えるやうに聞き取られて、何となく悚然し  
た。」

「はじめて、其の二人の婦を見ましたのは、私が八つ九つぐらゐの時、故郷の生家で。・・・母親の若くてなくなりました一周忌の頃、山からも、川からも、空からも、町に雲の降りくれる、暗い、寂しい、寒い眞夜中、小學校の友だちと二人で見ました。――なまけものゝ節季ばたらきとか言つて、試験の支度に、徹夜で勉強をして、ある地誌略を讀んで居ました。――白山は北陸道第一の高山にして、郡の東南隅に秀で、越前、美濃、飛騨に跨る。三峰あり、南を別山とし、北を大汝嶽とし、中央を御前峰とす。・・・後に劍峰あり、其状、五劍を植るが如し、皆四時雪を戴く。山中に千仞瀑あり。御前峰の絶壁に懸る。美女坂より遙に看るべし。しかれども唯飛流の白雲の中より落るを見るのみ、眞に奇觀なり。此他美登利池、千歳谷――と、びしよ／＼と冷く讀んで居ると、しばらく降止んで、ひっそりして居たのが急にばら／＼と霰に成つた。霰・・・横の古襖の破目で眞暗な天井から、ぼつと燈明が映ります。寒さにすくんで鼠も鳴

かない、人ツ子の居ない二階の、階子段の上へ、すつと其の二人の婦が立ちました。縞の銀沓返の方のが椅子臺の煤けた洋燈を持つて居ます。此處で、聊でも作意があれば、青い蠟燭と言ひたいのですが、洋燈です。洋燈の其の燈です、其の燈で、圓鬚の婦の薄色の衣紋も帯も判然と見えました。あつと思ふと、トン／＼、トン／＼と靜な躰育とゝもに階子段を下りて来る。キヤツと云つて飛上つた友だちと一所に、すぐ納戸の、父の寢て居る所へ二人で轉り込みました。此が第一時の出現で、小兒で邪氣のない時の事ですから、此は時々、人に話した事がありますが、すが。

翌年でしたか、また秋のくれ方に、母のない子は、蛙がなくなから歸る、で、一度別れた友だちを、尚ほさみしさに誘ひたくつて、町を左隣家の格子戸の前まで行くと、此のしもた屋は、前町の大商人の控屋で、凡そ十人ぐらゐは一側に並んで通ることの出来る、廣い土間が、おも屋まで突抜けて居ると言ふのですが、その土間と、いま申した我家の階子段とは、暗い壁一重に成つて居ました。

稚い時は、だから、よく階子の中段に腰を掛けて、壁越に、その土間を歩行く聲音や、ものいふ人聲を聞いて、それをあの何年何月の間か、何處までも、ほり抜くと、土一皮下に人聲がして、遠くで鶏の鳴くのが聞えたと言ふ、別の世界の話聲が髣髴として土間から漏れる。・・・小兒ごろに、内の階子段は、お伽話の怪い山の、其のまゝ薄暗い坂でした。

――其處が、いまの鄰家の格子戸から、間をつ框に置いて、大な穴のやうに偶と見えまして。――その口へ、園鬚の婦がふつと立つ。同時に並んで居た銀杏返のが、腰を消して、一寸足もとの土間へ俯向きしました。此は、疊を通るのに、駒下駄を脱いで、手に持つのだ、と見る、と・・・其のしもた家へ、入るのではなくて、人の居ない間を通抜けに、此の格子戸へ出ようとすのだ、何故か、然う思ふと、急に可恐く成つて、一度、むかうへ駈出して、また夢中で、我家へ遁込んで了ひました。

二年ばかり經つてからです。父のために、頻に後

妻を勤めるものがあつて、城下から六七里離れた、合歡の濱　――と言ふ、・・・・いゝ名ですが、土地では、眠さうな目をしたり、坐睡をひやかす時に、「それ、ねむの濱からお迎が。」と言ひます。ために夢見る里のやうな氣がします。が、村に桃の花があつて、濱の白砂へ影がさす、いつも合歡の花が咲いたやうだと言ふのださうです。その濱の、一向寺の坊さんの姪が相談の後妻になるので、父に連れられて行きました。生れてから三里以上歩いたのは、またその時がはじめてです。母さんが出来る、と云ふので、いくら留められても、大きな草鞋で、松並木を駈けました。庵のやうな小寺で、方丈の濡縁の下へ、すぐに静な浪が來ました。最も其の間に拾ふほどの濱はありません。――途中建場茶屋で夕飯は濟みました。――寺へ着いたのは、もう夜分、初夏の宵なのです。行燈を中にして、父と坊さんと何か話して居る。とんびずわりの足を、チク／＼蚊がくひます、行儀よくぢつとしては居られないから、そこは小兒で、はきものとも言はないで縁からすぐに濱へ出ました。・・・・雪國の癖に、もう暑い。まるッ切風がありません。池か、湖かと思

ふ渚を、小兒ばかり歩行いて居ました。が、月は裏山に照りながら海には一面に茫と靄が掛つて、粗い貝も見つからないので、所在なくて、背丈に倍ぐらゐな磯馴松に凭懸つて、入海の空、遠く遙々と果しも知れない浪を見て、何だか心細さに涙ぐんだ目に、高く浮いて小船が一艘。――渚から、然まで遠くない處に、その靄の中に、影のやうな婦が二人。――船はすら／＼と寄りました。

舷に手首を少し片腕をもたせて、ぢつと私を視たのが圓鬚の婦です、横に並んで銀杏返のが、手で浪を搔いて居ました。その時船は銀の色して、濱は颯と桃色に見えた。合歡の花の月夜です。――  
「やあ父さん。――彼處に母さんと、よその姉さんが。――後々私は、何故、あの時、その船へ飛込まなかつたらうと思ふ事が度々あります。世を憐む時、病に困んだ時、戀に離れた時です。――無論、船に入らうとすれば、海に溺れたに相違ない。――彼處に母さんと、よその姉さんが、――然う言つて濡縁に飛びついたのは、まだ死なない運命だつたらう、と思ひます。

言ふまでもありませんが、後妻のことは、其處でやめに成りました。

可厭な、邪慳らしい、小母さんが行燈の影に来て坐つて居ましたもの。

俊之君は、話しかけて、少時思にふけつたやうであつた。

「その後、時を定めず、場所を選ばず、ともすると其の二人の姿を見た事があるのです。何となく、此は前世から、私に附纏つて居る、女體の星のやうに思はれます。――いえ、それも、世俗になづみ、所帯に煩はしく、家内もあるやうに成つてからは、つい、忘れ勝……と言ふよりも、思出さない事さへ稀で、偶に夢に視て、あゝ、また「あの夢か。」と、思ふやうに成りました。

――處が、此の八月の事です――  
寺と海とが離れたやうに、間を抜いてお話しませう。が、桃のうつる白妙の合歡の濱のやうでなく、途中は渺茫たる沙漠のやうで。

#### 四

「東京驛とうきょうえきで、少しすこ早めはやに待合まちあはして。．．．．．  
つれはまだかと、待合室まちあひしつからプラットホームでくちを出口でくち  
の方ほうへ掛かつた處ところで私わたしがハツと思おもひました。．．．．．  
まだ朝あさのうちだが、實じつに暑あつい。息苦いきぐるしいほどで、此こ

の日中が思遣られる。――海岸へ行くにしても、途中がどんなだらう。見合せた方がよかつた、と逡巡をしたくらゐですから、頭腦が何うかして居はないかと、危みました。

あの、いきれを擧げる……むツとした人混雑の中へ――圓鬚のと、銀杏返のと、二人の婦が夢のやうに、然も羅で、水際立つて、寄つて來ました。「あら。」と莞爾して、「お早う。」と若い方が言ふと、年上の上品なのは、一寸俯目に頷くやうにして、挨拶しました。」

――先刻は、唯、藝妓が二人、と著者は記した。――俊之君は、「年増と若いの。」と云つて話したのである。が、こゝに記しつゝ思ふのに、どうも、どつちも――これから後も――それだと、少なくとも、著者が此の話についてうけた印象に相當しない。更めて假に姉と、妹としようと思ふ。

「私は目が覺めたやうに、いや、龍宮から東京驛

へ浮いて出た気がしました。同時に、どや／＼往來する人脚に亂れて二人は、もう並んでは居ません。私と軽い巴に成つて、立停りましたので。……何の秘密も、不思議もない。――此が約束をした當日の同伴なので。……實は昨夜、或場所で、餘りの暑さだから、何處かいき抜きに、そんなに遠くない處へ一晩どまりで、と姉の方から話が出たので、可からう、翌日にも、と酒の勢で云つたものゝ、用もたゞまつて居ますし、さあ、何うしようか、と受けた杯を定まして、――四五日経つてからの方が都合は可いのだがと、煮切らない。……姉さんは温和だから、え／＼御都合のいゝ時で結構。で、杯洗へ、それなり流れようとした處へ、「何の話? ……」と、おくれて来た妹が、いきなり、「明日が可い、明日になさい、明日になさい、あゝかう云つてると、またお流れに成る。」其處で約束が極つて、出掛ける事に成つたのです。――昨夜の今朝ですもの、其の二人を、不思議に思ふのが却つて不思議なくらゐで。いや自然の好は妙なものだ、すらりとした姉の方が、細長い信玄袋を提げて、肩幅の廣い、背の低い方が、

ポコンと四角張つて、胴の膨れた鞆を持つて居る、と、ふとをかしく思ふほど、幻は現實に、お伽の坊やは、藝妓づれのいやな小父さんに成りましたよ。

乗込んでから、また何うか云ふ工合で、女たちが二人並ぶか、それを此方から見る、と云つた風に成ると、髪形ばかりでも、菩提樹か、石榴の花に、女の顔した鳥が、腰掛けた如くに見えて、再び夢心に引入れられもしたのでありませうけれど、なか／＼、そんな事を云つて居られる混雑方ではなかつたのです。

折からの日曜で、海岸へ一日がへりが、群り掛る勢だから、汽車の中は、さながら野天の蒸風呂へ、衣服を着て浸つたやうなありさまで。．．．それでも、當初乗つた時は、一つ二つ、席の空いたのがありました。クシヨンは、あの二人づゝ腰を掛ける誹ので、私は肥満した大柄の、洋服着た紳士の傍、内側へ、何うやら腰が掛けられました。丁度、椅子を開いて向合に一つ空席がありましたので、推されながら、此の眞中ほどへ來た女たちが、

「姉さん。」

「まあ、お前さん。」

と譲合ひながら、その圓鬚の方が、とに角、其處へ掛けようとすると、

「一人居るんです。」と言つた、一人居た、茶

と鼠の合の子の、麻らしい・・・詰襟の洋服を

着た、瘦せたが、骨組のしつかりした、淺黒い男が、

席を片腕で叩くのです。叩きながら上着を脱いで、

そのあいた處へ匆ねました。――さいはひ斜違

のクシヨンへ、姉は掛ける事が出来ましたし、それ

と背中合せに、妹も落着いたんです。御存じの通り、

よつかゝりが高いのですから、その銀杏返は、髪も

低い・・・一寸雞箱へ、空色天鵝絨の蓋をした

形に、此方から見えなく成る。姉の圓髻ばかり、端

正として、通を隔てゝ向合つたので、此は弱つた

――目顔で串戯も言へない。――たかノ、

目的地まで三時間に足りないのだけれど、退屈だ

と思ひましたが、何うして、退屈などゝ云ふ贅澤は

言つて居られない、品川で又一もみ揉込んだので、

苦しいのが先に立ちます。その時も、手で突張つた

り、指で弾いたり、拳で席を拂いたり、「人が居

るです、一人居るですよ。」その、貴下 白  
襦衣君の努力と云つてはなかつた。誰にも掛けさせ  
まいとする。大方その同伴は、列車の何處か  
に知合とでも話して居るか、後架にでも行つてるの  
であらうが、まだ、出て来ません。此のこみ合ふ中  
で、それとも一人占めにしようとするのか知ら、些  
と怪しからんと思ふうちに、汽車が大森驛へ入つた  
時です。白襦衣君が、肩を聳やかして突立つて、窓  
から半身を乗出したと思ふと、眞赤な洋傘が一本、  
矢のやうに窓からスポリと飛込んだ。白襦衣君が。  
ハツとうけて、血の点滴るばかりに腕へ留めて抱き  
ましたが、色の道には、あの、スパルタの勇士の趣  
がありましたよ。汽車がまだ留らない間の早業でし  
てなあ。」

俊之君は、吻と一一息を吐いて言つた。

「敏捷い事・・・忽ち雪崩れ込む乗客の眞前  
に大手を振つて、ふは／＼と入つて来たのは、巾着  
ひだの青い帽子を仰向けに被つた、膝切の洋服扮装  
の女で、肱に南京玉のピカ／＼したオペラバツクと

云ふ奴を釣つて、溢出しさうな乳を壓へて、其の片  
手を――振るのではない、洋傘を投げたはずみ  
がついて、情力が留まらなかつたものと考へられま  
す。お定りの、もう何うにも成らないと云つた大な  
尻をどしんと置くのだが、扱ひつけて居ると見えて、  
輕妙に、ボンと、其の大な浮袋で、クシヨンへ叩き  
つけるると、赤い洋傘が股へ挟まつたやうに捌ける、  
そいつを一蹴けつて黄色な靴足袋を膝でよぢつて兩  
脚を重ねるのをキツカケに、ゴム靴の爪さきと、洋  
傘の柄をつゝく手がトン／＼と刻んで動く、と一所  
に、片腕を白襯衣の肩へ掛けて、圓々しい頤を頬杖  
で凭せかけて、何と、危く乳首だけ兩方へかくれた、  
一面に寛けた胸をぶふ／＼と揺つて、「おゝ、辛  
度。」と故とらしい京辯で甘つたれて、それから  
饒舌る。のべつに饒舌る・・・黄色い齒の上下  
に動くのと、猪首を巾着帽子の縁で突くのと同時に  
んです。

二の腕から、頸は勿論、胸の下までべた塗の白粉  
で、大切な女の膚を、厚化粧で見せてくれる・・・  
・・・それだけでも感謝しなければ成りません。剩

へ貴い血まで見せた、その貴下、いきれを吹きさうな鳩尾のむき出た處に、ぼち／＼ぼちと蚤のくつた痕がある。

――川崎を越す時分には、だらりと、むく毛の坐えた頸を垂れて、白襯衣君の肩へ眉毛まで押着けて、坐睡をはじめたのですが、俯向けぢやあ寢勝手が悪いと見えて、ぐら／＼首を揺るうちに、男の肩へ、斜に仰向け状にぐたりと成つた。何うも始末に悪いのは、高く崩れる裾ですが、よくしたもので、現にその蚤の痕をごし／＼引掻く次手に、膝を捻ぢ合はせては、ポカリと他人の目の前へ靴の底を蹴上げるのです。

男の方は、その重量で、窓際へ推曲められて、身體を弓形に堪へて納まつて居る。はじめは肩を抱込んで、手を女の背中へまはして居ました。……膚いきれと、よつか／＼りの天鵝絨で、長くは暑さに堪りますまい。やがて、魚を仰向けにしたやうな、ぶくりとした下腹の上で涼ませながら、汽車の動搖に調子を取つて口笛です。

娑婆は此のくらみにして送りたい、羨しいの何のと申して。

私は目の遣場に困りました。往來の通も、ぎつしり詰つて、まるで隙間がないのです。現に私の頭の上には、緋手絡の大圓鬘が押被さつて、此の奥さんもそろ／＼中腰に成つて、坐睡をはじめたのです。こくり／＼と遣るのに耳へも頬へもばら／＼とおくれ毛が掛つて来る。・・・鬘のおくれ毛が掛るのを、とや角言つては罰の當つた話ですが、何うも小唄や小本にあるやうに、此がヒヤリと参りません。べと／＼と汗ばんで、一條かゝると濠とします。たゞし、色白で一才、きれいな奥さんでしたが、えらい子持だ。中を隔てられて、むかうに、海軍帽子の小兒を二人抱いて押されて居る、脊のひよろりとしたのが主人らしい。其の旦那の分と、奥さん白身のと、ー私 は所在なさに、勘定をしましたが、小兒の分を合はせて洋傘九本は・・・何うです。さあ、事こゝに及んで、ー現實の密度が濃く成つては、圓鬘と銀杏返の夢の姿などは、餘りに影が薄すぎる。・・・消えて幽霊に成つて了つ

たかも知れませんが。

「清涼薬」

と、むかうで、一寸燥いだ、お轉婆らしい、その銀杏返の聲がすると、ちらりと瞳が動く時、顔が半分無理に覗いて、フンと口許で笑ひながら、恚う手が、よつかゝりを越して、姉の圓鬚の横へ傳つて、白く下りると、其の紙づゝみを姉が受けて、子持の奥さんの肩の上から、

「清涼薬ですつて。．．．．．嘸ぞお暑い事です。」

と、腹の上で揺れてる手を流眊に見て、身を引きました。

私は苦笑をしながら、つひぞ食べつけない、レモン入りの砂糖を舐めました。――如何、此の動作で、其の二人の婦が漸と影を顯はし得た氣がなさりはしませんか。

時に、おなじく其の赤い蝙蝠――の比翼の形を目と鼻の前にしながら、私と都合つた年配の紳士は、世に恐らく達人と云つて可い、いや、聖人と云

ひたいほどこで。――何故と云ふと、此の紳士は大森を出てから、つがひの蝙蝠が鎌倉で、赤い翼を伸して下りた時まで、眠り續けて居ました。・・・

眞個に寝て居たのかと思ふと、然うではありません。つがひが飛んだのを見ると、明に眼を活かして、棚の Panama 帽を取つて、フツと埃を窓の外へ弾きながら、

「御窮屈でございましたらう。・・・御迷惑で。」

澄まして挨拶をされて、吃驚して、

「いや。どう仕りました。」

と面くらふ隙に、杖を脇挟んで悠然と下車しましたから。」

俊之君は、こゝで更に居坐を直して續けた。

「お話のいたしやうで、何うお取りに成つたか知れないのでありますが、私は紳士に敬意を表すると、もに、赤い蝙蝠にも、年兒の奥さんにも感謝します。決して敵意は持ちません。そのいづれの感化であつたかは自分にも分かりません。が、とに角、其の晩、二人の婦と、一ツ蚊帳に……成りたけ離れて寝ましたから。

「さあ、何時頃だつたでせう。二度めに、ふと寝苦しい暑さから、汗もねば／＼として目の覺めましたのは。――夜中も、其の沈み切つた底だつたと思ひます。うつ／＼しながら糠に咽せるやうに鬱陶しい、羽蟲と蚊の聲が陰に籠つて、大蚊帳の上から壓附けるやうで息苦しい。

蚊帳は廣い、大いのです。廻縁の角座敷の十五疊一杯に釣つて、四五ヶ所釣を取つてまだづるり――と中だるみがして、三つ敷いた床の上へ蔽ひかゝつて、縁へ裾が溢れて居る。私には珍らしいほどの

殆ど諸侯道具で。……餘り世間では知りませ  
んが、旅宿が江戸時代からの舊家だと聞いて來たし、  
名所だし、料理旅籠だし、ますから、いづれ由緒あ  
るものと思はれる、従つて古いのです。其上、一  
面に嬰兒の掌ほどの穴だらけで、干潟の蟹の巢のや  
うに、たゞ一側だけでも五十破れがあるのです。勿  
論一々繼を當てた。……古麻に濃淡が出来て、  
恚う瞬をするばかり無數に取巻く。……此の  
大痘痕の化ものゝ顔が一つ天井から拔出したと成  
と、可恐さのために一里滅びようと言つたありさま  
なんです。――こゝで一寸念のために申します  
が、此の旅籠屋も、昨年の震災を免れなかつたのに、  
然も一棟焚けて、人死さへ二三人あつたのです。――  
蚊帳は火の粉を被つたか、また、山を荒して、畑  
に及ぶと云ふ野鼠が群り襲ひ、當時、壁も襖も防ぎ  
やうのなかつた屋のうちへ押入つて、散々に喰散ら  
したのかとも思はれる。

女中が二人で、宵に此の蚊帳を劇つた時、

「まあ。」

と浮りしたやうに姉が云ふと、

「お氣の毒だわね。」

と思はず妹も。．．．此の兩方だつて、おなじく手拭浴衣一枚で、生命を助つて、此の蚊帳を板にした同然な、節穴と隙間だらけのバラツクに住んで居るのに、それでさへ然う言つた。

「實は、海岸も大分片よつた處ですから、唯聞いたばかり、繪で見たばかりで様子を知らない。」

「宿が潰れた上、焚けて人死があつた事は、途中自動車の逕轉手に聞いて、はじめて知つたのです。」

「それは少し心配だな。」

二人の婦も、黙つて顔を見合せました。

可恐しい崖崩れが其のまゝに成つて居て、自動車が大揺れに煽つた處で。．．．また其がために様子を聞きたくもなつたのでした。

然として、  
運轉手は悼馬を乗鎮めるが如くに腰を切つて、昂

「来る．．．九月一日、十一時五十九分までは大丈夫請合ひます。」

と笑つて言つた。――（八月十日頃の事です）  
が）――

畜生、巫山戯て居る。私は………昨々年――  
家内をなくしたのでございますが、連がそれだつたら恚う云ふ蔑めた口は利きますまい。いや、此に對しても、いまさら他の家へとも言ひたくなし、最も其家をよしては、今頃間貸をする農家ぐらゐなものでせうから。

「構はない、九月一日まで逗留だ。」

と擬勢を示した。自動車は次第に動搖が烈しく成つて乗込みました。入江に渡した村はづれの土橋などは危なかしいものでした。

場所は逗子から葉山を通つて秋谷、立石へ行く間の浦なんです。が、思つたとは大變な相違で、第一土橋と云ふ、其の土橋の下にまるで水がありません、………約束では、海の波が靜に此の下を通つて、志した水戸屋と云ふの庭へ、大な池に流れて、縁前をすぐに漁船が漕ぐ。蘆が青簾の筈なんです。處が、執方を向いても一面の泥田、沼ともい

はず底が浅い。構をたゞきつけた同然に炎天に湧いたのが汐で焼けて、がさ／＼して、焦げて居ます。……あの遠くの雲が海が知らんと思ふばかりです。干潟と云ふより亡びた沼です。氣の利いた蛙なんか疾くに引越して、のたり、のたりと蚯蚓が雨乞に出さうな汐筋の窪地を、列を造つて船蟲が這まはる。……その上を、羽蟲の大群が、隨處に固つて濛々と、舞つて居るのが炎天に火薬の煙のやうに見えました。

半ばひしやげたまゝの藤棚の方から、すく／＼と此の屋臺を起して支へた、突支棒の丸太越に、三人廣縁に立つて三方に、此の干からびた大沼を見た時は、何だか焼原の東京が戀しく成つた。

贊澤だとお叱んなさい。私たちは海へ涼みに出掛けたのです。

「海には汐の満干があるよ、いまに汐がさすと一面の水に成る。」

折角、樂みにして、嬉しがつて來た女連に、氣の

毒らしくつて、私が言譯らしく然う言ひますと、

「嘸ぞようござんせうねお月夜だつたら。」

姉の言つた事は穩です。

些と跳ねものゝ妹のをお聞きなさい。

「雪が降るといゝ景色だわね。」

眞實の事で。……此は決して皮肉でも何で

もありません。成程こゝへ雪が降れば、雪舟が炭團を描いたやうに成りませう。

それも、まだ座敷が極つたと言ふのではなかつたので。……この座敷には、蜜柑の皮だの、キヤラメルの箱だのが散ばつて、小兒づれの客が、三崎へ行く途中、晝食でもして行つた跡を其のまゝらしい。障子はもとより開放してありました。古襖がたてつけの悪いまゝで、其の繪の塞山拾得が、私たちが指して囁き合つて居る體で、おまけに、手から拔出した同然に筭が一本立掛けてあります。

串戯にも、此ぢや居たゝまらないわけなんです、些とも氣に成らなかつたのは、――先刻廣い、冠木門を入つた時――前庭を見越したむかうの

縁で、手をついた優しい婦を見たゝめです。・ ・ ・  
・ ・ ・ すぐ其の縁には、山林局の見廻りでもあらうか  
と思ふ官吏風の洋装したのが、高い沓脱石を踏んで  
腰を掛けて、盆にビール罎を乗せて居ました。また  
此の形は、水戸屋がむかしの茶屋旅籠のまゝらしく  
て面白し。・ ・ ・ で、玄關とも言はず、迎へられ  
たまゝ、其の傍から、すぐ縁側へ通つたのですが、  
優しい婦が、客を嬉しさに見て、

「お暑うございましたせう、まあ、ようこそ、  
ー 一寸お休み遊ばして。」

と、すぐ其の障子の影へ入れる、とすぐ靴の紐を  
纏つて居た洋装のが、ガチリと釣銭を衣兜へ挿込んで、  
が、がつしりした洋傘を支いて出て行く。・ ・ ・  
いまの婦は門外まで、それを送ると、入違ひに女中  
が、端近へ茶盆を持って出て、座蒲團をと云つた工  
合で？ ・ ・ ・ うしろに古物の衝立が立つて、山  
鳥の剥製が覗いて居る。ー 處へ、三人茶盆を  
中にして坐つた様子は、いまに本堂で、志す精靈の  
讀經が始りさうで何とも似て陰氣な處へ、じと／＼  
汗に成るから堪りません。・ ・ ・ そこで、掃除の  
濟まない座敷を、のそ／＼して、ー 右の廻縁

へ立つた始末で。・・・恚う鹽辛い、大沼を視  
めるうちに、山下の向う岸に、泥を食つて沈んだ小  
船の、舷がさくらに成つて、鯉ならまだしも、朝  
日奈が取組合つた鰐の頭かと思ふのを見つけたのも  
悲惨です。

山出しの女中が来て、何うぞお二階へ、――  
助かつた、こゝで翌朝まで辛抱するのかと断念めて  
居たのに。――いや、階子段は、いま来た三崎  
街道よりづゝと廣い。見事なものです。三人撒いた  
やうに、ふら／＼と上ると、上り口のまた廣々とし  
た板敷を、縁側へ廻る處で、白地の手拭の姉さんか  
ぶりで、高箒を片手に襷がけで、刻足に出て行逢つ  
たのが其の優しい婦で、一寸手拭を取つて會釋しな  
がら、軽くすり抜けてトン／＼と、堅い段を下りて  
行くのが、あわたゞしい中にも、如何にも淑かで登  
音が柔うございました。

何とも容子のいゝ、何處かさみしいが、目鼻立の  
きりゝとした、帯腰がしまつて居て、そして媚かし  
い、なり恰好は女中らしいが、すてきな年増だ。二  
十六七か、と思つたのが――此の水戸屋の娘分

―― お由紀さんと言ふのだとあとで分りました。

―― また、奇異なものを見ました。――

貴下には、矢張り唐突に聞えませうが、私には度々の事です。……何かと申すと――例の怪しい二人の婦の姿です。――私が湯から上りますと、二人は最う持参の浴衣に着換へて居て、お定りの伊達巻で、湯殿へ下ります、一人が市松で一人が獨鈷……それも可い、……姉の方の脱いだ明石が、沖合の白波に向いた欄干に、染から衣紋竹で釣つて掛けてさぼしてある。裙にかくして、薄い紫のぼかしに成つた蹴出のあるのが、すら／＼捌くやうに、海から吹く風にそよいで居ました。

―― 午後二時さがりだつたと思ひます。眞日中で、土橋にも濱道にも、人一人通りません。が、さすがに少し風が出ました。汗が引いてスツと涼しい。

―― と其の蹴出しの下に脱いで揃へた白足袋が、蓮……蓮には濟まないが、思ふまゝ言はして下さい。……白蓮華の蒼のやうに見えました。同時に、横の襖に、それは欄間に釣つて掛けた、妹

の方の明石の下に、また一絞りにして朱鷺色の錦紗のあるのが一輪の薄紅い蓮幸に見えます。――東京驛を出て、汽車で赤蝙蝠に襲はれた、のち此の時まで、（あゝ、涼しい。）と思へたのは、自動車で来る途中、山谷戸の、路傍に蓮田があつて、白いのが二三輪、早にも露を含んで、紅蓮が一輪、むかうに交つて咲いたのを見た時ばかりであつたからです。

また涼しい風が颯と來ました。羅は風よりも軽い……姉の明石が、竹を迂ると、さらりと落ちたが、畳まれもしないで、煽つた襟をしめ加減に、細りと成つて、脇あけも採れながら、フツと宙を浮いて行く。……あ、あ、と思ふうちに、妹のが誘はれて、恚う並んでひら／＼と行く。後の、裙が翻つたと見る時、ガタリと云つて羅の抜けたあとへ衣紋竹が落ちました。一つは撥られるやうに、一つは抱くやうにと、見るうちに、床わきへ横に靡いて兩方裙を流したのです。

私は悚然とした。

ばかりではありません。こゝで覺めるめかと思ふ  
夢でない所を見ると、此が空蟬に成つて、二人は、  
裏の松山へ、湯どのから消失せただけではなからうか  
ー 些と仰山なやうであるが眞個・ ・ ・ ・ 勝  
手を知つた湯殿の外まで密と様子を見に行つたくら  
みです。婦の事で、勿論戸は閉めてある。妹の方の  
笑聲が湯氣に籠つて、姉が靜に小桶を使ふ。その白  
い、かゞめた背筋と、桃色に成つた湯の中の乳のあ  
たりが、卑い事だが、想像されて。・ ・ ・ ・ たゞ  
し、紅白の蓮華が浴する、と自讃して後架の前から  
急に跽音を立て、二階の見霽へ歸りました。

や、二人の羅が、もとの通り、もとの處に掛つて  
居る、最も女中が来て、掛け直したと思へば、それ  
までなんです、まだ希有な氣がしたのです。

けれども、午飯のお詔が持出されて、湯上りの二  
人と向合ふ、鯛のあらひが氷に乗つて、小蝦と胡爪  
が揉合つた處を見れば無事なものです。然も女連は  
ビールを飲む。ビールを飲む佛もなし、鬼もない。  
おまけに、「冷蔵庫ぢやないわね。」　　そ、そん

な幽霊があるもんぢやありません。

況や、三人、そこへ、ころ／＼と晝寝なんぞは、その上、客も、藝妓もない、姉も妹も、叔母さんも、更に人間も、何にもない。

暮方、またひとつたりと蒸伏せる夕風になりました。が、折から淡りと、入江の出岬から覗いて来る上汐に勇氣づいて、土地で一番景色のいゝ、名所の丘だと云ふのを、女中に教はつて、三人で出掛けました。もう土橋の下まで汐が来ました。路々、唐黍畑も、おいらん草も、そよりもしないで、たゞねばりつくほどの暑さではありませんが、煙草を買へば

「私が。」 「あれさ、細いのが私の方に。」 と女同士・・・東京子（とうきょうこ）は小遣（こづかひ）を使ひます。野掛（のが）け（け）氣分（きぶん）で、ぶら／＼七八町出掛けまして、地震（ちしん）で崩れたまゝの危（あぶな）かしい石段（いしだん）を、藪（やぶ）だの墓（はか）だの、間（あいだ）を抜けて、幾（いく）蜿（わん）りかして、項上（ちやうじやう）へー誰（だれ）も居（ゐ）ません。葎（よしず）張（はり）の茶店（ちやみせ）が一軒（けん）、色（いろ）の黒（くろ）い皺（しな）びた婆（ばあ）さんが一人（ひとり）、眞黒（まっくろ）な犬（いぬ）を一匹（ひき）、膝（ひざ）に引（ひき）つけて居（ゐ）て、じろりと、犬（いぬ）と一所（いっしょ）に私（わたし）たちを視（なが）めましたつけ。

此の婆さんに、可厭な事を聞きました。――

……此處で、姉の方が、隻手を床几について、少し反身に、浴衣腰を長くのんびりと掛けて、ほんのり夕靄を視めて居る。崖縁の臺つきの遠目金の六尺ばかりなのに妹が立掛つた處は、誰も言うた事ですが、廣重の繪を其のまゝの風情でしたが――  
婆々の言ふ事で、變な氣に成りました。

目の下の水田へは雁が降りるのださうです。向うの森の山寺には、暮六つの鐘が鳴ると言ふ。其の釣鐘堂も崩れました。右の空には富士が見える。それは唯深い息づきもしない靄です。沖も赤く焼けて居て、白帆の影もなし、折から星一つ見えません。

「御覽じやい、あないにの、どす黒くへりを取つた水際から、三反も五反と、沖の方へさ汐の干た處へ、貝、蟹の穴からや、によき／＼と蘆が生えましてぞい。あの……蘆がつくやうでは、此の浦は、はや近うちに、干上つて陸になるぞいの。然うもござりましょ。……去年の大地震で、海の

底が一體に三尺がとこ上りましての、家々の土地面が三尺たゝら踏んで落込みましたもの、の。いま、さいて来た汐も、あれ、御覽じやい。．．．海鼠が這ふやうにちよろ／＼と、蘆間をあとへ引きますぞいの。村中が心を合せて、泥浚をせぬ事には、こゝの浦は、いまの間に干潟に成つて、やがて、たゞ茫々と蘆ばかりに成るぞいの。」

何だか獨言のやうに言つて聞かせて、鑄茶釜に踞んで、ぷつ／＼遣るたびに、黒犬の背中を擦ると、犬が、うゝ／＼、ぐう／＼と遣る。變に、犬の腹から聲を揉出すやうで、あ、あの婆さんの、時々ニヤリとする齒が犬に似て居る。薄暮合に、熟として居る犬の不氣味さを、私は始めて知りました。

「――旦那様方が泊らつしやつた、水戸屋がの、一番に海へ沈んだぞいの。」

靄の下に、また電燈の光を漏らさない、料理旅館は、古家の藁を黒く、亞鉛屋根が三面に薄りと光

つて、あらぬ月の影を宿したやうに見えながら、縁も庇も、すぐあの蛇のやうな土橋に、庭に吸はれて、小さな藤棚の遁げようとする方へ、大きく傾いて居るのでした。

「……其の時は、此の山の下からの、土橋の、あの入江がや、もし……一面の海でござつたがの、轟と沖も空も鳴つて來ると、大地も波も、一齊に箕で煽るやうに揺れたと思はつしやりまし。……あの水戸屋の屋根がの、ぐしや／＼と、骨離れの、柱離れで挫げての——私らは、此の時雨の松の——  
—と言ひました。字の傘のやうに高く立つて、枝が一本折れて、崖へ傾いて居るを指して、

「松の根に這ひ縋つて見ましたがの、潰れた屋の棟の瓦の上へ、一ちさきに、何處の犬やら、白い犬が乗りましたぞい。乾してあつた浴衣が、人間のやうに、ばツ／＼と欄干から飛出して、瀉の中へへばりつく。もうその時は、沖まで汐が干たぞいの。ありや海が倒に成つて裏返つたと思ひましたよ。その白

犬がの、狂氣に成つたかの、沖の方へ、世界の涯までと駈出すと思ふ時、水戸屋の乾の隅へ、屋根へ抜けて黄色な雲が立ちますとの、赤旗がめら／＼と擲んで、眞黒な煙がもん／＼と天上まで上りました。男衆も女衆も、其の火を消す間に、帳場から、何から、家中切もりをしてござつた彼家のお祖母様が死なしやつた。人の生命を、火よりさきへ助ければ可いも68のと、村方では言ふぞいの。お祖母様が雛兒のやうに抱いてござつた小兒衆も二人、一所に死んだぞの。孀つゞきの家で、後家御は一昨年なくならした。娘さんが一人で、や、一氣に家を装立て、居さつしやりますよ。姉さんぢや。弟どのは、東京の學校さ入つて居さつしやるで。・・・地震の時は留守ぢやつたで、評判のようないは姉娘でござりますよ。――家とおのれは助かつても、老人小兒を殺いてはなう／＼黒犬を、なう、黒犬や　――

勝手にしろ。殺したのではない、死んだのである。その場合に、壓に打たれ、火に包まれたものと進退をともしるのは、助けるのではない、自殺をする

のだ、と思ひました。……私わたしは可いや厭な事ことを聞きいた、しかし、祖母そぼと小ちひさい弟きやうだい妹いを死しなせて水み戸と屋やを背せ負おつて生いき残のこつたと言いふ娘むすめ分ぶん、――あの優やさしい婦をんなが確たしかにと、此この時とき直よく覽かつて知しりましたが――  
どんなに心こころ苦くしいか……此この狭せまい土とち地で、  
嘸さぞ肩かた身みが狭せまからう。――胸むねのせまるまで、い  
としく、可あはれ憐なに成なつたのです。

「可いや厭な婆ばあさん」

「黒くろ犬いぬが憑ついてるやうね。犬いぬも婆ばあのやうだつた

よ。」

石いし段だんを下おりかゝつて、二ふた人たりが然さう云いつた時とき、ふと  
見み返かへると、坂さかの下した口ぐちに伸の掛しかつて覗のぞいて居あました。こ  
んな時ときは、――鹿しかは贊ぜ澤たくだ。寧むしろ虎とらの方ほうが可いい。  
礫つぶてを取とつて投なげようとするのを二ふた人たりに留とめられ  
て……幾いくつも新あたらしい墓はかがある――墓はかを見み  
ながら下おりたんです。

時ときに――「見みたいわね。」妹いもなぞも然さう言い  
つたのですが、お由ゆ紀きさんは、それ切きり姿すがたを見みせなか

つ たのです。

大分話が前後に成りました。

處で、眞夜中に寢苦しい目の覺めた時です。が、娘分に對しても決して不足を言ふんぢやあない。……蚊帳の此の古いのも、穴だらけなのも、一層お由紀さんの寓事最惜さを思はせるのけれども、それにしても凄まじい、——先刻も申した酷い繼です。鄰室には八疊間が二つ並んで、上下だゞ廣い家に、其の晩は又一組も客がないのです。此邊に限らず、何處でも地方は電燈が暗うございますから、顔の前に點いて居ても、疊の目が漸と見える、それも蚊帳の天上に光つて居ればまだしも、此の燈に羽蟲の集る事夥多しい。何しろ、三方取巻いた泥沼に群れたのが蒸込むのだから堪りません。微細い奴は蚊帳の目をこぼれて、むら／＼降懸るものですから、當初一旦寢たのが、起上つて、妹が働いて、線を手繰つて、次の室へ電燈を持って行つたので、其れなり一枚開けてあります。其の襖越しにぼんやりと明が届く、蚊帳の裡の薄暗さをお察し下さ

い。ー 鹿を連れた仙人の襖の南畫も、婆々と  
黒犬の形に見える。・・・あゝ、此の家がぐわ  
しや／＼と潰れて乾の隅から火が出た、三人の生命  
が梁の下で焼けたのだと思ふと、色合と言ひ、皺と  
いひ、一面の穴と言ひ、何だか、ドス黒い沼の底に、  
私たちが倒れて居るやうな氣がしてなりません。

「あゝ、これは尋常事でない。」  
一體小兒の時から、三十年近くの間 ー ふと  
思ひ寄らず、二人の婦の姿が、私の身の周圍へ顯は  
れて、目に遮る時と云ふと、善にしる、惡にしる、  
それが境遇なり、生活なりの一轉機と成るのが、こ  
れまでに例を違へず、約束なのです。とに角、私の  
小さい身體一つに取つて、一時期を劃する、大切な  
場合なのです。

「これは、尋常事でない。」  
私は形に出る・・・此の運命の映繪に誘はれ  
ていま不思議な處へ來た ー こゝで一생을終る  
のではないか、死ぬのかも知れない。

枕も髪も影に成つて、蒸暑さに沓脱ぎながら、行儀よく祖違へた、すんなりと伸びた浴衣の裾を洩れて、しつとりと置いた姉の白々とした足ばかりが燈の加減に浮いて見える。白い指をすツノと刻んで、瞳をふうはりと浮いて軽い。あの白蓮華を又思ひました。

取縋つて未來を尋ねようか、前世の事を聞かうか。

――

唯、此の方は、私の隣に寝て居る。むかうへ、一嵩一寸低く妹が寝て居ました。……三  
分……五分

紅い蓮華がちら／＼と咲いた。幽に見えて、手首ばかり、夢で蝶を追ふやうなのか、何うやら此方を招くらしい。

――抱きしめて、未來を尋ねようか。前世の事を聞かうか。――

招く方へは寄易い。

私は、貴方、巻蓑の火を消しました。

爾時です。ばち／＼と音のするばかり、大蚊帳の  
繼穴が、何百か、ありツたけの目に成りました。

――蚊帳の目が目に成つた、――否、それ  
が一つ一つ人間の目なんです。――お分りにな  
り憎うございませうか知ら。――一齊に、そ  
の何十人かの目が目ばかり出して熟と覗いたのです。  
瞳る、瞬く、瞳が動く。――馬鹿々々しいが  
眞個です。瞳る。瞬く、瞳が動く。――生々  
として覗いて居ます。暗い、低い、大天井ばかりを  
餘して、蚊帳の四方は残らず目です。

私はすくんで了ひました。

いや、すくんでばかりは居られません。仰向けに  
胸へ緊乎と手を組んで、兩眼を押睡つて、氣を鎮め  
ようとしたのです。

三分・・・五分　――　十分　――

魔は通つて過ぎたらうと、堅く目を開きますと、  
――鹿と仙人が、婆々と黒犬に見える、――  
其の鄰室の襖際と寢床の裾　――　皆が沖の方を

枕にしました。――裾の、袋戸棚との間が、もう一ヶ所通で、裏階子へ出る、一人立の口で。表二階の縁と、廣く續いて、兩方に通口のあるのが、何だか宵から、暗くて寂しうございました。――いま、その裏階子の口の狭い處にぼつと人影が映して色の白い婦が立ちました。私は驚きません。それは圓鬘の方で……すぐ銀杏返のが出る、出て二人並ぶと同時に膝をついて、駒下駄を持つたらう。小兒の時見たのと同じやうだ。で、蚊帳から雨戸を宙に抜けて、海の空へ通るのだらうと思ひました。私の身に、二人の婦の必要な時は、床柱の中から洋燈を持つて出て來た事さへありますから。……

「はゝあ。」

著者は思はず肱を堅くして聞いたのであつた。

「――處が其の婦は一人きりで、薄いお納戸色の帯に、幽な裾模様が、すつと蘆の葉のやうに映りました。すぐ背を伸ばせば届きます。立つて、ふは／＼と、凭りかゝるやうにして、ひつたりと蚊帳に顔をつけた。あゝ、覗く。．．．ありたけの目が、その一ところへ寄つて、欄々として燃えて大蛇の如し．．．とハツとするまに、目がない、鼻もない、何にもない、艶々として亂れたまゝの黒髪の黒い中に、ぺろりと白いのつぺらぼう。――

「――  
 著者は黙つて息を呑んで聞いた。

「うゝ、と殺されさうな聲を呑むと、私は、此の場合、婦二人、生命を預る．．．私は、むくと起きて、しにみに覺悟して、蚊帳を刎ねた、爾時、横ゆれに靡いて、あとへ下つた其の婦が、氣に壓されて遁げ状に板敷を、ふら／＼とあと退りに退るのを夢中で引捉へようと思いました。胸へ届きさうな私

の手が、いなるが早い、何とも申しやうのない事は、その婦は三四尺ひらりと空へ飛んで、宙へ上つた。白百合が裂けたやうに釣られた兩足の指が反つて震へて、素足です。藍、淺葱、朱鷺色と、鹿子と、絞と、紫の匹田と、ありたけの扱帝、腰紐を一つなぎに、夜の虹が化けたやうに、婦の乳の下から腰に絡はり、裾に搦んで。・・・下に膝をついた私の肩に流れました。雪なす兩の腕は、よれて一條に成つて、裏欄干の梁に釣した扱帯の結目、丁ど緋鹿子の端を血に巻いて縋つて居る。顔を背けよう／＼と横仰向けに振つて、よぢつて伸ばす白い咽喉が、傷々しく伸びて、蒼褪める頬の色が見る／＼うちに、その咽喉へ隈を薄く浸ませて、身悶をするたびに、踏處のない、つばまつた蹴出が亂れました。凄いと、美しいとも、あはれとも、・・・踏臺が置いてある。目鼻のない、のつぺらぼうと見えたのは、白地の手拭で、顔の半ば目かくしをして居たのです。

俊之君は、やゝ、聲忙しく語つた。此處で吻と一息した。

「いま、此を處置するのに、人の妻であらうと、妾であらうと、娘であらうと、私は抱取らなければ成りません。」

私は綺麗なばけものを、横抱きに膝に抱いて助けました。聲を殺して、

「何をなさる。」

扱帯で兩膝は結へて居ました。けれども、首をくゝるのに、目隠をするのは可訝しい。氣だけでも顔を隠さうとしたのかと思ふ。いや、然うでないのです。それに、實は死なうとしたのではない。私から遁げようとしたので、目を隠したのは、見まい見せまいぢやあない。蚊帳を覗くためだつたのだから餘程變です。」

「前後のいきさつで、大抵お察しでありませう。それはお由紀さんでございました。」

申憎うございますけれども、――今しがた、  
 貴方の御令閨のお介添で――湯殿へ参つて居ります、あの女なのです。

これでは……その時の私と、由紀とのうけこたへに、女のものいひが交りましては、尚ほ申憎うございますから、わけだけを、手取早く。

由紀は、人の身の血も汐も引くかと思ふ、干瀉に崩家を守りつゝ、日も月も暗く成りました。……  
 ・村の口の端、里の蔭言、目も心も眞暗に成りますと、先達て頃から、神棚、佛壇の前に坐つて、目を閉ぢて拜む時、そのたびに、恚う俯向く……  
 と、衣ものゝ縞が、我が膝が、影のやうに薄りと浮いて見えます。それが毎日のやうに度重ると段々に

判然見える。姿見のない處に、自分の顔が映るやうで、向うが影か、自分か影か、何とも言へない心細い、寂しい氣がしたのださうです。緋は那樣でない、縞の方が、餘計にきつぱりとしたのが、次第に、おなじまで、映る事に成つたと言ひます。たゞ、神佛の前にぬかづく時　――　ほかには何の仔細もなかつた。

處が當日、私たちの着きますのが、もう土橋のさきから分つたと言ふのです。それは別に氣にも留めなかつた。黄昏に三人で、時雨の松の見霽へ出掛け、縁の柱で、悄乎と、藤棚越に伸上つて見て居ると、二人に連れられて、私の行くのが、山ではなしに、干潟を沖へ出て、それ切歸らない心持がして成らなかつた。無事に山へ行きました。――　が、遠目金を覗くのも、一人が腰を掛けたのも、――　――　臺所へ引込んでまでもよく分る。それと、もに、犬婆さんが、由紀の身について饒舌るのさへ聞えるやうで。……それがために身を恥ぢて、皆の床の世話もしなかつた。極りの悪い、蚊帳の所爲ばかりではないと言ひます。夜の進むに従つて、

私たちの一舉一動がよく知れた。

三人が一寢入したでせう、うと／＼として一度目を覺ます、其の時でした。妹の方が、電燈を手繰つて隣の室へ運んで居たのは。――「大變な蟲ですよ」と姉は寢ながら懶さうに團扇を動かす。蚤と蚊で・・・私も痒い。身體中、くわツといきつて、堪らない、と蚊帳を飛出して、電燈の行つたお鄰へ兩腕を捲つて、むず／＼搔きながら、うつかり入ると、したゝかなものを見ました。頭から足のさきまで、とろりと白い膏のかゝつたはり切れさうな膚なんです。蚤を振つて脱いで居たので・・・電燈の下へ立派に立つて、アハ、と笑ひました。

「抱くと怪我をしてよ。・・・夏蟲さん――」  
「いや、どうも、弱つた。」と襖の蔭へ、晩に押して置いた卓上臺の前へ、くつたりと小さく成る。「生憎、薬が。」と姉が言ふと「香水をつけて上げませう、かゆいのが直るわよ。」

と一氣に其の膚で押して出て、「どうせお目に掛けたんだ、暑さ凌ぎ。ほゝゝゝ。」袋戸棚から

探つて取つた小罎を持つて、胸の乳、薰つてひつたりと、「これ、こゝも、こゝも、こゝも、こゝも。」 蟲のあとへ、ひや／＼と罎の口で接吻をさせた。

あゝ、此の時は弱つたさうです。．．．由紀は佛間に一人、蚊帳に起きて端正と坐つて、そして目をつぶつて、さきから俯向いて一人居たださうですが、二階の暗がり、その有様が、下の奥から、歴々と透いて見えたのですから。――年は長けても處女なんです。何うしていゝか分らない。あつちへ遁げ、此方へ避け、たゞ人の居ない處を、壁に、柱に、袖をふせて、顔をかくしたと言ふぢやありませんか。

私は冷い汗を流した、汗と一所に掌に血が浸んだ。  
――帯も髪も亂れながら、兩膝を緊乎結へて居る由紀を、板の間に抱いたまゝ、手を離さうにも、頭をふり、頭を掉つて、目を結へたのをはづしませんでした、見くびつて、したゝかくひ込んで居た蚊の奴が、血をふいてぼとりと落ちたのです。

私は冷く成つて恥ぢました。けれども、その妹も、並んだ姉も、たゞの女、たゞの藝妓に、私が扱ひ得なかつたことは、お察し下さるだらうと存じます。

「――痒さは、香水で立處に去りましたが、息が詰る、餘り暑いから、立つて雨戸を一枚繰りました。」「おゝ涼しい。」「勢に乗じて、妹は縁の眞正面へ、蚊帳の黒雲を分けたやうに、乳を白く立つたのですが、ごろ／＼ごろ、がたん。間遠に荷車の音が、深夜の寂寞を破つたので、ハツとかくれて、籐椅子に涼んだ私の蔭に立ちました。此の音は妙に凄うございました。片輪車の變化が通るやうで、そのがたと門にすれた時は、鬼が乗込む氣勢がしました。

姉がうつとりした聲で、

「あゝ、私は睡い。……お寢よ、いゝからさ。」「澤山おつしやいよ。」「餘り夜が深い。何だか、美しい化鳥と化鳥が囁いて居るやうに聞えた。」「あ、梟が鳴いて居る。」「唯一つ、遙に、先刻の山の、時雨の松のあたりで聞えました。

此の、梟が鳴き、荷車の消えて行く音を聞いた時、由紀は、その車について、戸外へ出たはうと思つたと言ひます。しかし氣がついた。いま外へ出れば、枝を探り、水を慕つて、屹と自殺をするに違ひない。……。それが可恐しい。由紀はまだ死にたくない未練があると思つたさうです。――眞個です、その時戸を出たらば魔に奪られたに相違ありません。

私たちも凄かつた。――岬も、洲も、掲も、山も、峰の松も、名所一つづゝ。――一ヶ所一體の魔が領して居るやうに見えたのですから。「天狗様でせうか、見でせうか、私たちとはお宗旨違ひだわね。引込みませう可恐いから。」居かはつて私の膝にうしろ向きにかけて居た銀杏返が言つたのです。

由紀は残らず知つて居ました。

それから、私も餘程寢苦しかつたと見えます

――先にお話した二度めに目を覺ましますまで、

ものゝ一時間とはなかつたさうで――由紀の下  
階から透して見たのでは――餘り判明見えるの  
で、由紀は自分で恐ろしく成つて、此は發狂するの  
ではないかと思つた。それとも、唯、心で見ると迷ひ  
で、大蚊帳の裡の模様は實際とまるで違つて居るか  
も知れない。それならば、まよひだけで、氣が違ふ  
のではないであらう。どつちか確めるのは、自分で  
一度二階へ上つて様子を見なければ分らない。が深  
く堅く目を瞑つて居ると思ひつゝ……それが  
病氣で、眞個は薄目を明けて居るのかも計られない、  
と、身だしなみを、恥かしくないまでに、坐つて力  
タノノと箆笥をあけて、きものを着かへて、それが  
ら手拭で目を結へて、二階へ上つたのださうですが、  
數ある段を、一步も誤らず、すら／＼と上りながら、  
氣が咎めて、二三度下りたり、上つたり、……  
また幾度、手で探つても、三重にも折つた手拭はち  
やんと顔半分蔽うて居る。……いよ／＼蚊帳  
を覗くと成ると、餘りの事に、それが此の病氣の峠  
で、どんな風に、ひきつけるか、氣を失ふか、倒れ  
るかも分らない。その時醜くないやうにと、兩膝を  
くゝつたから、くゝつたまゝで、蚊帳まで寄つて來

るのです、間が近いけれども、それでは忍んでは歩  
行けますまい。……扱帯を繫いで、それに縋  
つて、道成寺のつくりものゝやうに、ふら／＼と幽  
妻だちに、爪立つた釣身になつて覗いたのださうで  
す。私に追はれて、あれと遁げる時、――たゞ  
たよりだつたのですかち、其の扱帯を引手練つて、  
飛退かうとしたはずみに、腰が宙に浮きました。

浅間しい、……極が悪い。……由紀  
は、いまは生きて居られない。――恚うして居  
ても、貴方（とはじめて顔を振向けて、）私の  
抱て居る顔も手も皆見える。此が私を殺すのです

――と云つて、置處のなささうな顔を背ける。  
猿轡とか云ふものより見ても可哀な其の面縛した罪  
のありさまに、

「心配なさる事はない。私が見えないやうにして  
上げる。」

と云つて、目隠の上を二處吸つて吸ひました。

貴下、慰めるにしても、氣休めを言ふにしても、  
何と云ふ、馬鹿な、可哀しい、呪詛つた事を云つた  
ものでせう。

手拭は取れました。

「あれ、お二方が。」

と俯向く處を、今度はまともに睫毛を吸つた。

「—— そのお二方ですが、由紀が、唯、憚つたばかりではなかつたので。すら／＼と表二階の縁の端へ、歴々と、圓鬚と銀杏返の顔が白く、目をばつちりと並んで出ました。由紀を抱きかくしながら蹠つて見た時、銀杏返の方が莞爾すると、圓鬚のが、頷を含んで眉を伏せた、ト顔も消えて、衣ばかり、晝間見た風の羅に成つて、スーツと、肩をかさねて、階子段へ沈み、しづみ、トン／＼と音がかしました。

二人の其の婦の姿は、いつも用が済むと、何處かへ行つて了ふのが例なのです。

しかし、姉も妹も、すや／＼と蚊帳に寝て居た事は言ふまでもありますまい。

たゞ不思議な事は、東京へ歸りましてからも、其の後時々逢ひますが、勝手々々で、一人だつたり、

三人だつたり、姉と妹と二人揃つて立つた場合に出  
會はなかつたのでございます。

「――少々金の都合も出来ました。いよ／＼決心  
をして先月……十月……再び水戸屋を  
訪ねました時、自動車が杜戸、大くづれ、秋谷を越  
えて、傍道へかゝる。……あすこだつたと思  
ふ、紅蓮が一莖、白蓮華の咲いた枯田のへりに、何  
の草か、幻の露の秋草の畦を前にして、崖の大巖に  
抱かれたやうに、巖窟に籠つたやうに、悄乎と一人、  
淡くイんだ婦を見ました。

「やあ、水戸屋の姉さんが。」  
と運轉手が言ひました。

ひらりと下りますと、

「旦那様――」

知らせもしないのに、今日来るのを知つて、出迎  
に出たと云つて、手に縫つて、あつい涙で泣きまし  
た。今度は、清い目を二いてても、露のみ溢れて、私  
の顔は見えない。

由紀は、急な眼病で、目が見えなくなりました。

「―― 結婚はまだしませんが、所帯寓事引受けて、

心ばかりは、なぐさめの保養に出ました。――  
途中から、御厚情を頂きます。

あゝ、歸つて来ました。……御令聞

が手をお取り下さつて、

と廊下を見つゝ涙ぐんで。

「髪も、化粧も、爲て頂いて……あの、き

れいな、美しい、あはれな……嬉しさうな。」

と言ひかけて、無邪氣に、握拳で目を壓へて、渠  
は落涙したのである。

涙はともに誘はれた。が、聞えるスリツパの跽音

にも、其の（二人の婦）にも、著者に取つては、  
何の不思議も、奇蹟も殆ど神秘らしい思ひでない

のが、ものたりない。

【完】